2020 年 10 月

第六報　新型コロナウイルス感染症の感染拡大による
内服薬処方箋動向変化につきまして

株式会社日本医薬総合研究所
営業企画グループ

新型コロナウイルス感染症（COVID-19)の感染拡大が続き、その影響や対策に世界中が注力する中、日本調剤グループで医薬コンサルティング事業を行っている株式会社日本医薬総合研究所（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：三津原　庸介）では、独自に運用する「処方箋データベース」をもとに、COVID-19 感染拡大が薬局での処方箋に与えた影響を調査しておりますが、このほど第六報がまとまりましたのでご報告いたします。

＜影響分析対象項目＞

医薬品市場は、［市場］＝［施設情報］×［医師情報］×［患者情報］×［薬剤情報］×［投薬情報］の５要素で捉えることができます。

六回目の今回は、内服薬の新規患者処方動向に対して COVID-19 感染拡大が与えた影響を分析しております。

① 内服薬の処方動向分析

2019 年 1 月から 2019 年 12 月までの月次あるいは週次平均値を 100%（基準）とし、2020 年 1 月から 2020 年 9 月までの期間で集計しました。月次集計には弊社月次処方データベース RI-CORE を、週次集計には週次処方データベース RI-CORE(weekly)、及び日次処方データベース RI-PDS を使用しました。

・対象期間：2020 年 1 月から 2020 年 9 月
・対象店舗：日本調剤　573 店舗（2020 年 9 月現在、2019 年 1 月以降の新規店舗を除く）
・対象薬剤：内服薬

② 内服薬の患者動向分析

調剤年月より 24 カ月以前に処方箋データがない患者を新規来局患者としました。第五報の有効患者も用いて

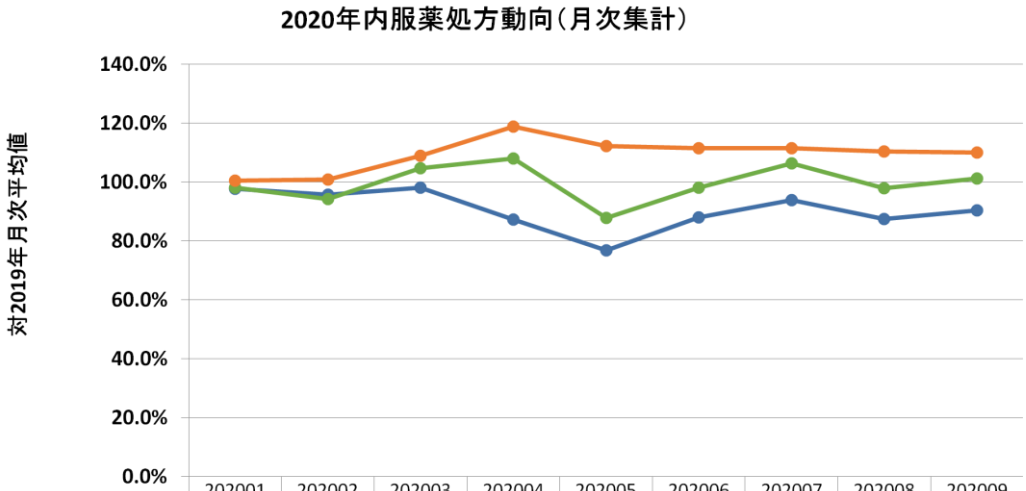
有効患者（服用中の患者）= 新規来局患者 + 継続来局患者 + 非来局患者

と分けることが出来るため、新規来局患者、継続来局患者、非来局患者の患者数を集計しました。対象期間、店舗、薬剤は内服薬の処方動向分析と同様です。

＜月次集計＞

過去の報告（第一報～第五報）と同じ集計方法で 9 月データを追加しました。

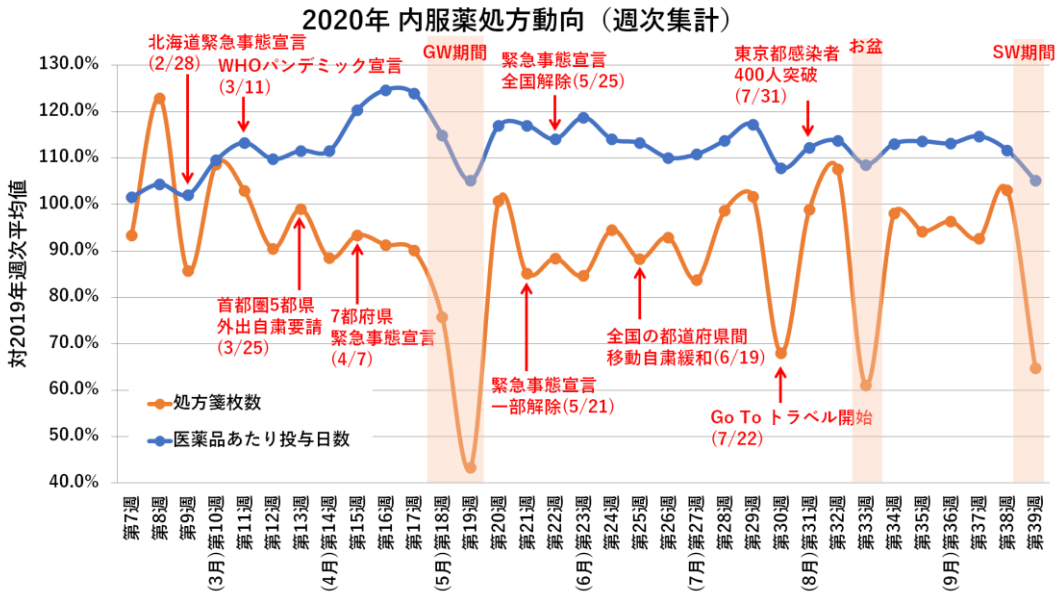
9 月データは処方箋枚数、総量、医薬品あたり投与日数いずれも 8 月と同程度の値となりました。全体的に見てみると、6 月以降から処方箋枚数は 90%程度、投与日数は 110%程度で維持されており、総量が前年平均 100%程度で推移しています。

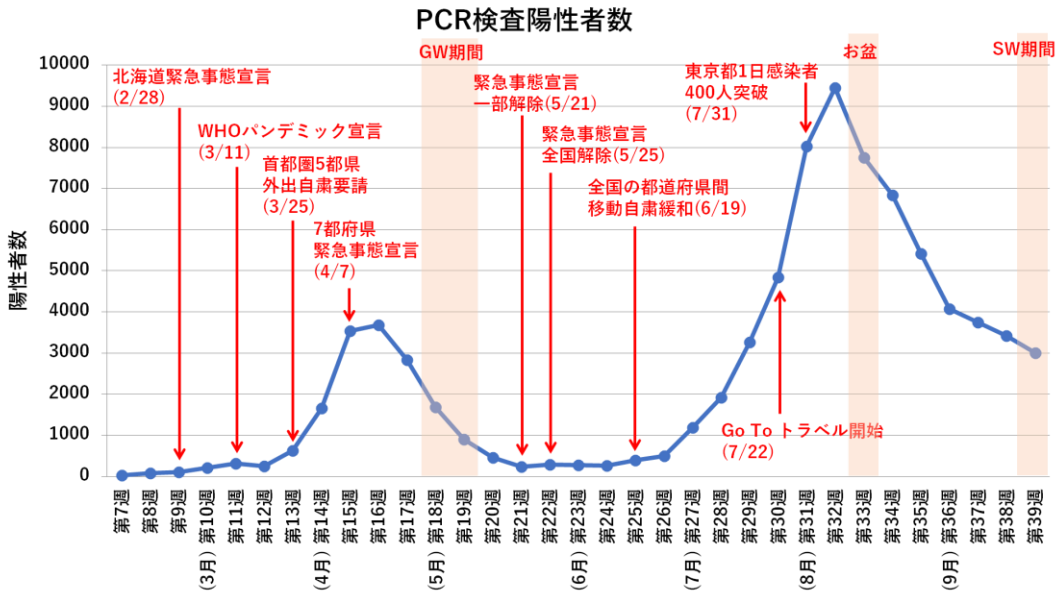


	202001	202002	202003	202004	202005	202006	202007	202008	202009
処方箋枚数	97.8%	95.8%	98.1%	87.2%	76.9%	88.0%	93.9%	87.5%	90.4%
総量	98.2%	94.2%	104.8%	107.9%	87.9%	98.1%	106.4%	97.8%	101.2%
医薬品あたり投与日数	100.5%	100.8%	108.9%	118.9%	112.2%	111.5%	111.5%	110.4%	110.0%

＜週次集計＞

月次集計と同様、店舗の営業日数の関係で処方箋数の変動はありますが、投与日数は前年比 110%前後での処方傾向が続いています。また、PCR 検査陽性者数と比較すると、4 月の陽性者数増加時に処方箋枚数が減少、医薬品あたり投与日数が増加していますが、8 月の陽性者数増加時は処方箋枚数の減少、医薬品あたり投与日数の増加はみられないようです。



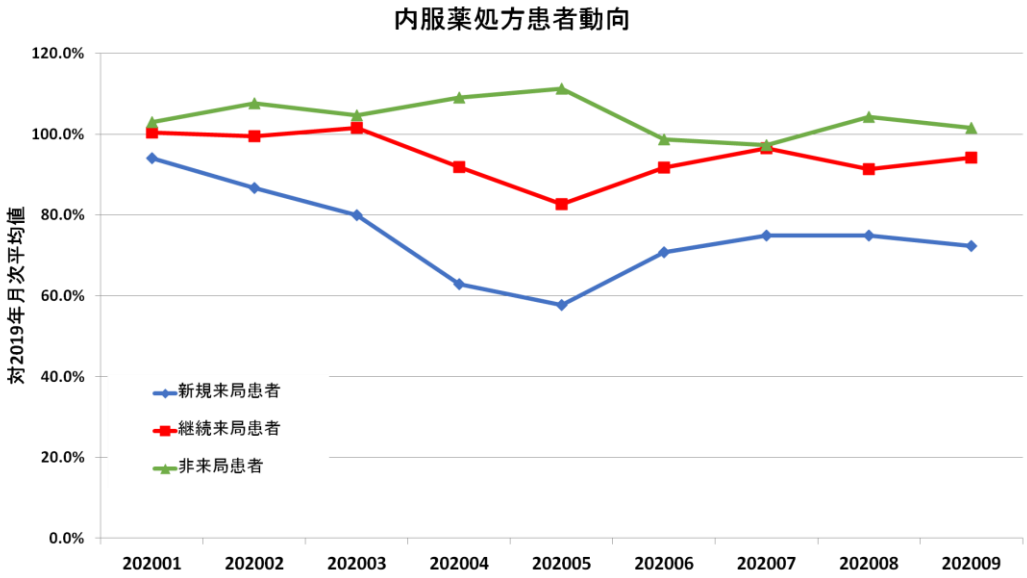


（厚生労働省の陽性者数オープンデータより作成　https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/open-data.html）

＜月次患者数集計＞

継続来局患者数は 4 月、5 月で減少傾向が見られました。対照的に、非来局患者は 4 月、5 月で増加傾向が見られているため、この期間で投与日数を長期化させ医療機関受診頻度を抑える患者が増え始めたことが再度確認できました。6 月以降は継続来局患者・非来局患者ともに前年平均に近づく傾向が見られます。

新規来局患者数は 4 月、5 月の減少が大きく、他の患者群よりも影響を受けていることがわかりました。6 月以降、患者数は前年平均の 80%であり、COVID-19 感染拡大以前の状況までには戻っていないため、受診抑制が継続していると考えられます。

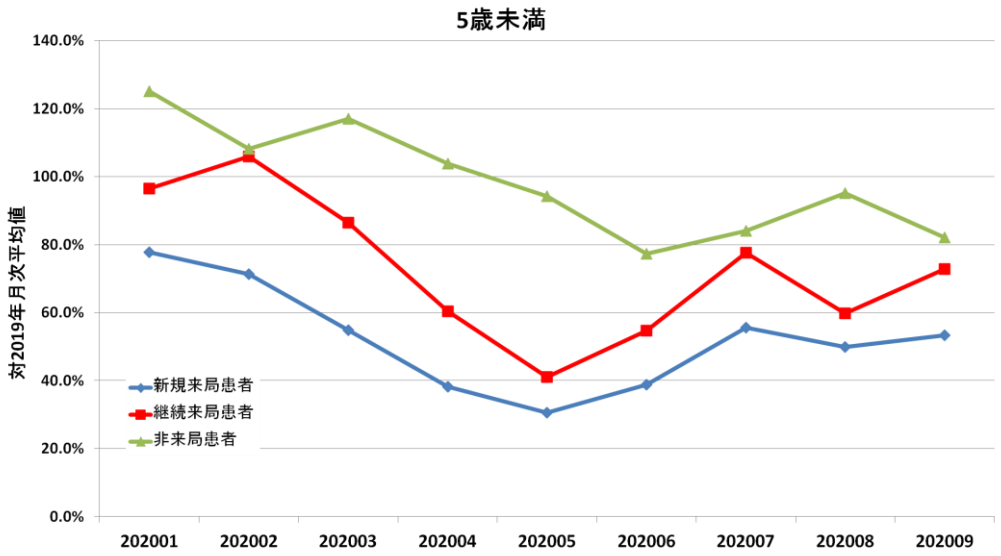


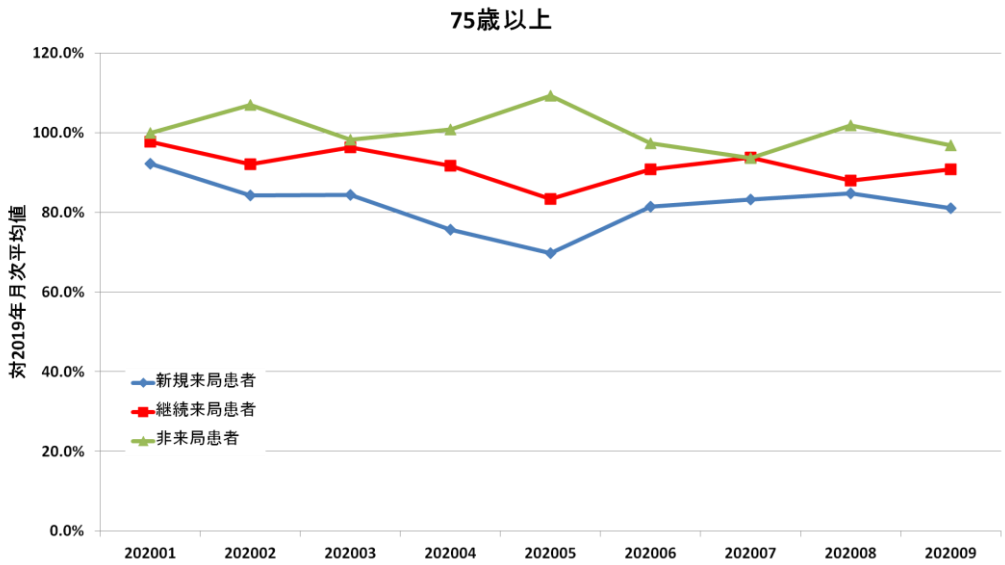
＜年齢別集計＞

年齢別に患者数の前年比を集計しました。第四報や第五報で報告した通り、大きく特徴が異なる 5 歳未満、75 歳以上に注目しました。

5 歳未満では、継続来局患者、新規来局患者は 5 月で大きく減少しています。7 月で回復傾向が見られましたが、いまだ 80%未満であり、回復まで時間を要することが予測されます。非来局患者も来局患者と同様に減少傾向が見られ、現在は 80%程度になっています。全ての患者群で減少傾向が見られていることから、市場規模自体が減少していると思われます。

75 歳以上では、5 歳未満と比較して変動は少ない傾向が見られました。9 月時点で非来局患者は 100%近くまで回復しています。また、先ほどの全年齢を対象とした月次集計と比較した場合、新規来局患者の変動が少なく、影響を受けにくいのも特徴と思われます。





2020 年 10 月

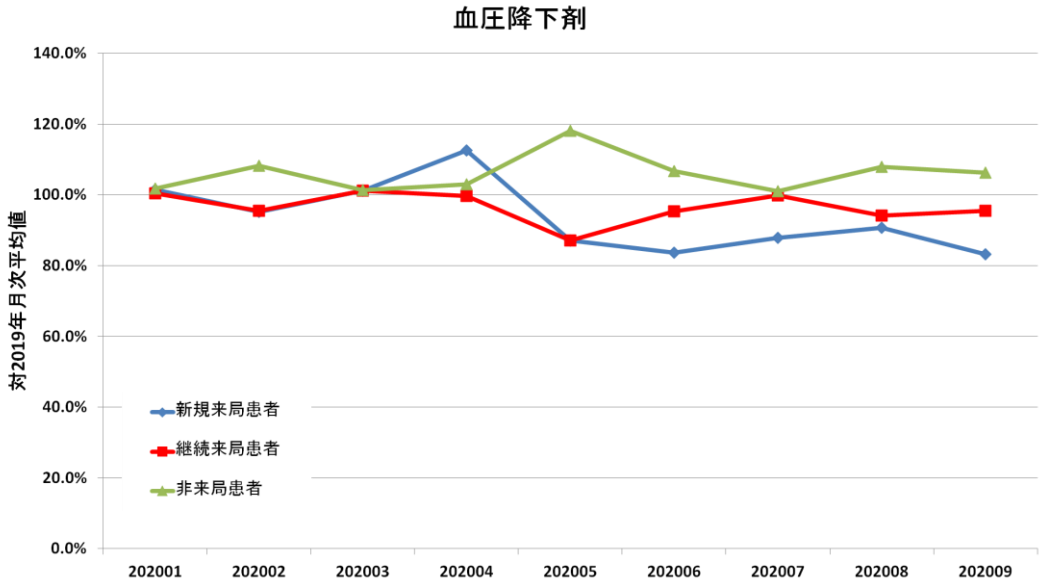
＜薬効別集計＞

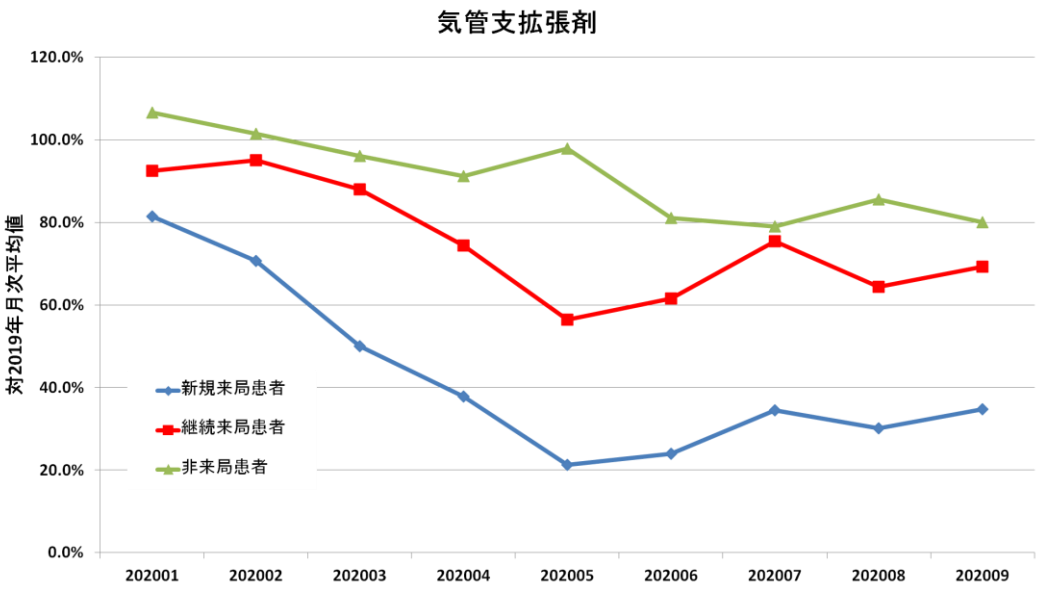
第三報で報告した血圧降下剤と気管支拡張剤に着目して患者数を集計しました。また、診断の遅れが懸念されている癌に対し、その他の腫瘍用薬についても同様に集計しました。薬効別集計では、集計対象の薬効群の処方が調剤年月より 24 カ月以内にない場合、新規来局患者としました。

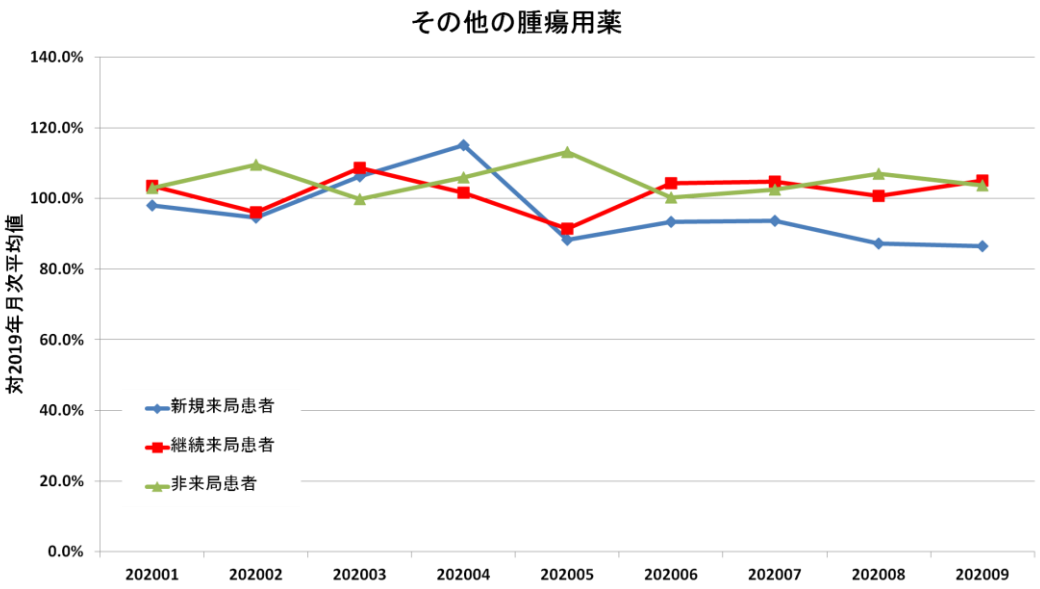
血圧降下剤は 5 月で継続来局患者の減少、非来局患者の増加が見られましたが、これは 4 月に投与日数を長期化させたためと思われます。9 月では両患者群とも 100%程度に落ち着いてきています。一方、新規来局患者は 5 月の減少以降、前年よりも低い水準であり、9 月では 80%程度となっています。

気管支拡張剤の継続来局患者、新規来局患者は 5 月で大きく減少しています。その後、回復傾向が見られますが、9 月でも継続来局患者は約 70%、新規来局患者は約 40%であり、前年程度まで回復するにはまだ時間を要すると思われます。非来局患者は 5 月まで 100%程度を維持していましたが、その後減少し、9 月で 80%となっています。患者群で差はありますが、COVID-19 感染拡大の影響を受けやすい薬効群と思われます。

その他の腫瘍用薬では、継続来局患者と非来局患者は 5 月で変動が見られましたが、他の期間では変動が少なく見られました。一方、新規来局患者は 5 月で減少以降、同程度の水準が維持されており、9 月で 86%となっていました。既に服用している患者では COVID-19 感染拡大による影響は少ないように見えますが、新規患者では影響を受けている可能性があります。







今回は新規患者数を導入し、有効患者を新規来局患者、継続来局患者、非来局患者に分けて集計することで、COVID-19 感染拡大による患者動向変化を分析しました。さらに年齢別、薬効群別で集計することにより、影響を受けやすい属性と受けにくい属性を見つけることが出来ました。

第一波が現れた 5 月前後は処方動向が大きく変化しましたが、第二波が現れた直近 3 カ月は変動が少なく落ち着いているようです。第一報の 2020 年 4 月データから今回の 9 月データ更新までの半年間、COVID-19 感染拡大が処方動向に与える影響について報告を続けて参りましたが、2020 年度上半期終了とともに処方動向変化の報告を一旦終了いたします。

2020年10月

当社では豊富な処方箋情報を元に、様々な処方動向の分析を行っております。調査されたい事項、テーマ等ございましたら、いつでもお問い合わせください。

［本件に関するお問い合わせ先］
株式会社 日本医薬総合研究所　営業企画グループ
E-MAIL: soken-info@jpmedri.co.jp
TEL: 03-6810-0812（代表）
URL: https://www.jpmedri.co.jp/